

I. 学校の概要(平成15年4月現在)

田 川 市 立 後 藤 寺 小 学 校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	1	13	21
児童数	59	47	53	43	44	44	2	292	

II. 研究の概要

1. 研究主題

意欲的に豊かな学びに取り組む子どもを育てる国語科・社会科学習指導の創造
 ～「読むこと」(国語)、「能力」(社会)を中心とする指導方法の工夫改善を通じた学力向上の取り組み～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・1年生～6年生・国語
 ・3年生～6年生・社会
 一昨年度実施した学力検査と学力意欲尺度より、低学力の児童の学習意欲は上昇していたが、高学力の児童は、学習意欲が低下するという傾向が認められた。また、教職員の授業観察による児童の課題については、「上位層と下位層に分かれてしまっている」「分かりやすく表現できない」「学習の成果を広げられない」などが提議された。
 そして昨年度実施した学力検査結果により、本校には、学力促進的な児童も学力補充的な児童もいることが分かった。そこで、従来型の一斉授業では、それに対応できにくいのではないかと指導方法の工夫改善が余儀なくされた。
 教科的に見ると、算数よりも国語の方が2.2ポイント低く、学力促進的な児童が算数では4%に対し、国語では2%と国語の方が低い値を示している。補充を要する児童については、算数が11%に対し、国語は13%と高くなっている。ここで、すべての言語活動の元となる国語に大きな課題があることが認められた。
 また、領域的に見ると、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」いずれも3～6ポイント下回っており、どの領域にも課題があることが明確になった。こうしたことから、昨年度より国語科の取り組みを中心に進めていくこととなった。そして国語科の各領域の取り組みの成果は、社会科の「取材や交流活動」「資料収集活動や調べ学習」「学習成果の表現」に生かせるのではないかと考え、社会科も併せて取り組むこととした。
 また、本校の基本的な構え「一人一人が生き生きと学習できる場を工夫しよう」から、一人一人が意欲的に様々な方法による表現活動を行うことが豊かな学びへつながり、学力の向上へつながっていくものと考え本主題を設定した。

(2) 年次ごとの計画

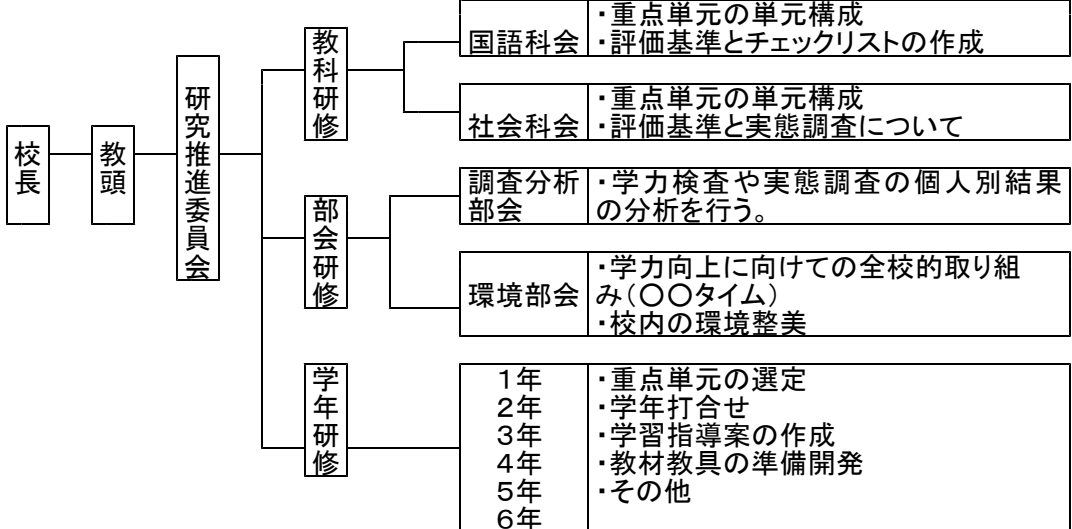
平成14年度
 ○一人ひとりに応じた指導体制・指導方法の工夫を通して研究主題を究明する。
 ○①各学年及び系統性をふまえた重点単元を設定し、基礎基本の明確化を図り、評価や教育方法の改善に役立てる。②教科の特性をふまえながら、補充・発展学習を効果的に位置づける。③専門性を生かした教科担任制や分割学習時における先生の固定観念を生まないような指導体制作りを図る。④基礎学力の定着を図るために、朝の活動の時間の有効活用を図る。
 【国 語】①単純分割、②コース別分割、③習熟度別分割、④達成度別分割、⑤進捗状況別分割
 ・ 交流活動を位置づけた単元構成をしたことによって、児童は、友達の作品や考えに多くふれることができた。
 ・ コース選択の際、コースの内容をしっかりと説明することで、児童は、自分の興味関心ばかりでなく、自分ができるようになったこと、つまずきや課題等をしっかりと考えることができるようになってきた。
 ・ 目的的活動を仕組むことにより、作文やお話作りが好きだという児童が増えてきた。
 ・ 「書くこと」を一学期二学期と継続して取り組んできたことで、単元末テストの平均が上昇してきた学年が見られた。
 【社 会】①課題並列型分割、②課題習熟度型分割、③グループ課題型分割、④個人課題型分割
 ・ 従来の学習とくらべて、多くのコース設定したことによって、より多くの社会的事象にふれさせることができた。
 ・ GTを活用したり、他のコースとの交流活動を位置づけた単元構成によって、児童は自分の意見と友達の意見を比較しながら考えを深めることができた。
 ・ こうした取り組みの成果により、重点単元の単元別テストの平均点は他の単元の平均点にくらべて、期待得点を、大きく上回った。

平成15年度
 ○「読むこと」(国語)、「能力」(社会)を中心とする指導方法の工夫改善を通じた学力向上の取り組み
 ○①各学年及び系統性をふまえた重点単元を設定し、基礎基本の明確化を図り、評価や教育方法の改善に役立てる。②教科の特性をふまえながら、補充・発展学習を効果的に位置づける。③専門性を生かした教科担任制や分割学習時における先生の固定観念を生まないような指導体制作りを図る。④基礎学力の定着を図るために、朝の活動の時間の有効活用を図る。
 ○【国 語】①単純分割、②コース別分割、③習熟度別分割、④達成度別分割、⑤進捗状況別分割
 【社 会】①課題並列型分割、②課題習熟度型分割、③グループ課題型分割、④個人課題型分割

平成16年度
 ○「話すこと・聞くこと」(国語)、「態度」(社会)を中心とする指導方法の工夫改善を通じた学力向上の取り組み。
 ○①各学年及び系統性をふまえた重点単元を設定し、基礎基本の明確化を図り、評価や教育方法の改

年度 善に役立てる。②教科の特性をふまえながら、補充・発展学習を効果的に位置づける。③専門性を生かした教科担任制や分割学習時における先生の固定観念を生まないような指導体制作りを図る。④基礎学力の定着を図るために、朝の活動の時間の有効活用を図る。
 ○【国語】①単純分割、②コース別分割、③習熟度別分割、④達成度別分割、⑤進捗状況別分割
 【社会】①課題並列型分割、②課題習熟度型分割、③グループ課題型分割、④個人課題型分割

(3) 研究推進体制



・部会研修を調査分析部会と環境部会に分け、児童の実態把握と環境設営に力を入れるようにした。また、従来の授業改革部会を独立させ、教科部会を設定することで、各教科の活性化と研究の深化を図ろうとした。

III 平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

学年	読むこと			言語事項		
	重点単元	一般単元	差	重点単元	一般単元	差
1年 物	+ 3.1	+ 5.5	- 2.4	+ 7.3	+ 5.5	+1.8
2年 物	+15.93	+13.52	+ 2.41	+10.97	+ 2.97	+8.0
3年 説	- 3.6	- 8.05	+ 4.45	- 9.45	-10.85	+1.4
4年 説	+ 3	-12.25	+15.25	- 3.1	- 5.4	+2.3
5年 説	+12.81	- 3.41	+16.22	+ 7.92	- 0.3	+8.22
6年 物	+ 6.22	+ 4.26	+ 1.96	+ 3.56	+ 3.15	+0.41

国語・社会ともに学年平均点と期待得点の差

【国語】
 ○ 読むことにおいては、物語文よりも、説明文単元の伸びが著しい。きめ細やかにワークシートを

国語に関する意識調査 (対象：2年生 47人)

項目	事前調査		事後調査	
	人数	割合	人数	割合
国語の学習が	大好き	15人(31.9%)	24人(51.1%)	
	好き	17人(36.2%)	20人(42.6%)	
	好きではない	15人(31.9%)	3人(6.4%)	
読書が	大好き	19人(40.4%)	19人(40.4%)	
	好き	17人(36.2%)	18人(38.3%)	
	好きではない	11人(23.4%)	10人(21.3%)	

準備し、一人一人の力の実態にあった方法で、丁寧に指導していったことが、このような結果をもたらしたのではないかと思われる。

○ 物語教材でも説明文教材でも言語事項については、伸びが認められ、繰り返し読む活動を取り入れたことの成果であるといえる。

○ 物語教材では、単元の後半において、「読みを広げる」という視点での分割、説明文教材では、単元の前半で、「読みとり」の習熟度による分割が効果的であった。

○ 目的的活動を仕組むことにより、読む書くという学習活動を取り入れた分割学習が、児童の国語に対する意識をよりよくさせている。

【社会】
 ○ 本年度は、資料活用と思考判断で取り組んだが資料活用では、3年生を除いて各学年ともに伸びが見られた。(3年生は取り組みが1学期で初めての社会科であったことや、比較が2学期単元のものであったために、このような結果になったのではないかとと思われる。)

○ 単元の中で地域教材を取り上げる部分について、コース別分割学習を行ったが、分割の事前事後で

資料活用

学年	重点単元	一般単元	差
3年	-7.45	-4.5	-2.95
4年	+3.3	-3.9	+7.2
5年	+3.65	-0.17	+3.82
6年	+0.8	-4.69	+5.49

	事実認識			関連認識		
	事前調査	事後調査	差	事前調査	事後調査	差
3年	10.9	27.6	+16.7	2.1	6.6	+4.5
4年	13.4	22.5	+ 9.1	3.8	3.5	-0.3
5年	7.3	29.9	+22.6	1.7	6.3	+4.6

イメージマップによる児童の認識の変化を見たところ、事実認識、関連認識(交流後の学習についても時間をとった5年生においては特に)とも大きく向上していた。

2. 今後の課題

【国語】
 ○ 読む活動を多く取り入れて単元を構成したが、読書が好きだという児童があまりふえなかった。
 ○ 習熟度別は3分割を基本に行ってきたが、1コースの人数が多い場合は、TT方式による指導よりもさらに等質の2分割の方が効果的である。

【社会】
 ○ 思考判断の領域では、余り伸びが認められない。単元構

学年	思考判断		
	重点単元	一般単元	差

成の段階で、重点単元を地域教材で行ったため、教科書の部分が、圧縮した構成となっていたために、教科書の範囲テストに結果が反映されなかったのではないかとと思われる。来年度も、思考判断の領域は、引き続き取り組む必要がある。	3年	-10.8	+1.8	-12.6
	4年	+5.1	+5.95	-0.85
	5年	-1.21	+3.87	+2.66
	6年	★	+0.63	★
	○ 昨年度、今年度と児童の認識の変容について、事実認識については、ある程度効果が出たものの、関連認識の4年については、効果が現れなかった。これは、自分が選択したコースを調べるところに時間がかかり、交流に十分な時間がとれず、広がりが見いだせなかったことが原因であると考えられる。来年度は、交流と交流後の学習の仕方、価値判断にまで高める部分を工夫していかなければならない。			
○ 年度当初に単元の重点化を図って時数の計画を考えたが、それでも時数超過となる学年が目立った。				

IV 学力把握のための学校としての取り組み

・各領域の学力実態把握のために、学力診断テストを4月に実施。1年から6年国語科。3年から6年社会科。
 ・学習意欲の実態把握のために、全学年で学校生活意欲尺度を質問紙法で実施。

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

* 研究会・授業公開等開催実績			
日 時	場 所	対 象	会の目的等
H15. 7. 3. (木)	後藤寺小学校	他校職員、保護者	公開授業
H15. 10. 1. (水)	後藤寺小学校	他校職員、保護者	公開授業
H15. 11. 27. (木)	後藤寺小学校	他校職員、保護者	公開授業 実践交流会
* 研究成果の普及 HPの作成(平成14年度分の公開授業の実践報告を掲載) 公開授業の案内を管内各校に配布			
* フロンティアティーチャーの研究成果の普及に関する活動実績 H15. 8. 4. (月) 教育研究発表会(全体会)にて発表 主催: 田川市教育研究所 場所: 田川青少年文化ホール			
* 研究成果の普及に関する反応や意見			
	成 果		課 題
	国語科	社会科	国語科 社会科
他校職員	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の理解が進む。 ・ワークシートが工夫されている。 ・教師の手だてが的確であった。 ・考える資料がたくさんあり、資料の活用の仕方がよく分かった。 ・課題発見の場が設けられ、社会科に対する意識が好転する。 ・研究会が少ないので参考になる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・授業準備にかなり時間がかかっている。 ・無理のしすぎでは。 ・自分の意見は、もっと堂々と発表して欲しい。 ・授業の時間配分が難しい ・コースによって人数格差がある。 ・子どもが希望するコースを選ばせてあげればよかった。
保護者	<ul style="list-style-type: none"> ・手を挙げるようになった。 ・発表を聞く態度がよい。 ・違った児童や先生との学習は刺激がある。 ・人数が少なくてとてもよい。 ・コース選択について児童と話げできた。 ・子どもが学習参観に来るように言ってくれた。 ・児童全員が授業に集中している ・授業がとても工夫され、興味がわく。 ・とても楽しそう。 ・児童の理解に十分な時間がとられている。 ・人前で発表するよい機会である。 ・家庭学習を頑張った。 		<ul style="list-style-type: none"> ・コースが合わなためか、理解ができていない。 ・書く場面が多くて物足りない。 ・授業に活気がない。 ・まともに無理に到達しようとしている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・校外学習のことを話してくれた。 ・自分のコースの学習内容を話してくれる。 ・プリントの構成がよい。 ・総合的な要素も考慮されている。 		

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T、Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無